

『妙法蓮華經』の譬喩表現に関する一考察

椿 正 美

0. はじめに

中国の六朝時代（222-589）と呼ばれる期間に訳出された漢訳仏典では、表現手段として譬喩法の利用も多く見られる。譬喩法とは、主張の内容に含まれる説得性の強化を図るために具体例を掲示する手法であり、形式には直喩法（simile）、隱喩法（metaphor）、提喩法（synecdoche）、換喩法（metonymy）、諷喩法（allegory）、引喩法（allusion）、声喩法（onomatopoeina）等が挙げられる。東元1968：377は、仏典に見られる譬喩法の特徴として①抽象の事物を表現するのに具象的な言葉を使用すること②難解な事物を理解しやすい言葉で表現すること③高遠なものを身近な言葉で表現することを挙げ、同研究の価値について「その表現を用いた人々の実生活を理解する助けになる」と認めている。

鳩摩羅什（344-413）の訳出による大乘仏教の經典『妙法蓮華經』（以後は略称『法華經』を使用）の文中にも多くの譬喩が含まれ、インドの仏教僧 vasubandhu（400年頃没、訳名は世親または天親）の自著『法華論』では、諷喩法と引喩法を用いた七種類の譬喩が取り上げられている。これが「法華七喩」と総称されるものであり、〈火宅喩〉（「譬喩品」）、〈窮子喩〉（「信解品」）、〈菓草喩〉（「菓草喩品」）、〈化城喩〉（「化城喩品」）、〈衣珠喩〉（「五百弟子受記品」）、〈髻子喩〉（「安樂行品」）、〈医子喩〉（「如来寿量品」）が含まれている¹⁾。

本論では、「法華七喩」の内容が掲示された部分に見られる様々な表現形式に

ついて分析し、それらの特徴や使用傾向について古典漢語文法の立場から探っていく。

1. 〈火宅喩〉（「譬喩品」）

1. 1. 仮設された背景の描写と問題の提起

『法華經』各品の文中では、譬喩を使用する目的について明確に記された部分が含まれることもある。「譬喩品」の場合は、既に記述された理論を代名詞“此”に指示させた“今当復以譬喩、更明此義（「今当に復譬喩を以て更に此の義を明すべし」）。”が構成され、その理由として“諸有智者、以譬喩得解（「諸の智あらん者、譬喩を以て解ることを得ん」）。”と述べられている。本章での調査対象となる〈火宅喩〉は、上記“此義”の内容を説明するための素材に当たる。

〈火宅喩〉では、遊びに夢中になっている子供達を燃え上がる家屋から避難させようと試みる長者の姿が描かれている。冒頭では背景と登場人物について表示され、更に文中では内容の経過に対する問題の提起が示されている。

それぞれの表現に該当する部分を次に挙げる。

(1) T09-0012B²⁾

若国邑聚落、有大長者。

国邑聚楽に大長者あらん。³⁾

(2) T09-0013A

是長者、等与諸子、珍宝大車、寧有虚妄不。

是の長者、等しく諸子に珍宝の大車を与うること、寧ろ虚妄ありや不や。

(1) は〈火宅喩〉の冒頭の部分に当たり、背景を描写した“国邑聚落”と人物の存在を示した“有大長者”により構成されている。文頭に置かれた“若”は仮定を示す連詞であり、王力1962：603は、この“若”の機能を「仮設」の表示と指摘している。

『妙法蓮華經』の譬喩表現に関する一考察（椿）

太田1964：85によれば、『論語』に用いられる連詞には、並列、添加、選択、逆接等の様々な意味を表示する語彙が含まれ、この分類では、“若”は承接を示す連詞に属している。更に、發揮する機能の内容に関しては、太田1964：88に「承接し論及することをあらわす」とあり、用例として「述而」「若聖與仁、則吾豈敢（「聖と仁との若きは、則ち吾豈敢てせんや）」が挙げられている。

（1）で“若”が發揮する機能はこれに当たる。

長者は、子供達に対し、もし“火宅”から外へ出れば羊車・鹿車・牛車を与えると告げ、子供達はこれを承諾して命を救われる。ところが、長者が実際に与えた物は、大きく白い立派な牛の車だった。世尊は、長者の発言が嘘に当たるのではないかと問題化し、舍利弗に向かって“於汝意云何（「汝が意に於て云何」）。”と問いかけた。（2）は、その時の質問の内容に当たる。

（2）では、まず主体となる“是長者”の行為について“等与諸子珍宝大車”と描写されている。文末の“寧有虚妄不”では、動詞句“有虚妄”に否定副詞“不”が添加されて反復疑問の形式が構成され、長者の行為が虚妄に当たるか否かという問題が提起されている。

以上のように、〈火宅喩〉が引用された部分では、仮設された状況を明確にするため、まず冒頭で背景の描写が揭示され、その後には問題を提起する表現が設けられている。この手法は、続いて挙げられる6種類の各譬喩が引用された部分でも応用され、『法華經』文中で譬喩の内容を揭示するための構成法として確立されている。

1. 2. “若”による仮定形式の構成と“況復”“何況”による拡張関係の表示

舍利弗は（2）の内容に対して“非為虚妄（「これ虚妄に非ず」）。”と答え、世尊から“善哉善哉、如汝所言（「善哉善哉、汝が所言の如し」）。”と評される。その際に舍利弗が“非為虚妄”と認識した根拠については、自身の発言内容から知ることができる。

それに該当する部分を次に挙げる。

(3) T09-0013A

若全身命、便為已得、玩好之具。

若し身命を全うすれば、便ち為れ已に玩好の具を得たるなり。

(4) T09-0013A

若是長者、乃至不与、最小一車、猶不虛妄。

若し是の長者、乃至最小の一車を与えざるも、猶お虚妄ならじ。

(3) では、冒頭に連詞“若”が置かれて仮定形式が構成されている。“若”以後の部分では、“全身命”が条件、“得玩好之具”が結果に当たり、両者間には因果関係が成立している。全体の文意としては、子供達が生命を救われたことにより玩具を入手できたという理論が表示され、措置の正当性が強調されたと解釈される。

“若”の字形は、『説文解字』に“従艸右、右手也（「艸右に従ふ、右は手なり）」とあり、両手で神託を受ける状態を示す象形と解釈される。このことから、“若”は「しなやかに従うこと」を意味し、表現の内容に柔軟性が含まれる仮定形式の構成にも連詞として応用されたと考えられる。

連詞“若”の前置による仮定表現は、例えば『春秋左氏伝』「僖公」“公子若反晋国、則何以報不穀（「公子若し晋国に反らば、則ち何を以て不穀に報いん」）」にも見られる。そこでは“公子返晋国”が条件、“何以報不穀”が結果に当たる。

(4) では、(3)と同様に“不与最小一車”に連詞“若”を前置させることにより仮定形式が構成されている。文意としては、やはり長者による“我以方便、令子得出（「我方便を以て子をして出ずること得せしめん」）」という発想の正当性が強調されている。但し、(3)の場合とは異なり、(4)では後部“不虛妄”に状態の持続を示す副詞“猶”が前置されている。この場合、前後部の間には譲歩関係または転折関係が成立すると認められる。

『妙法蓮華經』の譬喩表現に関する一考察（椿）

（3）の直後には、原文では更に“況復方便、於彼火宅、而拔濟之（「況んや復方便して彼の火宅より而も之を抜濟せるをや」）。”が続いている。ここでは、家屋からの脱出を達成させたという結末が表示されている。

冒頭に見られる“況復”とは、連詞“況”に副詞“復”を付加させて構成された表現である。“況”の字形は、『説文解字』に“寒水也（「寒水なり」）。”とあり、川を示す“水”が意符となる会意兼形声と捉えられる。藤堂1978：719は、“況”の意味について「水が前に比べてますます大きくふえること」と解釈し、以前より程度が激しくなることを意味する場合にも用いられたと記している。従って、連詞“況”は前述した内容の範囲の拡張を示すと考えられ、“況復”の場合、例えば杜甫「兵車行」“況復秦兵耐苦戦、被驅不異犬與鷄（「況んや復秦兵苦戦に耐うるをや、駆らるること犬と鷄とに異ならず」）。”に見られるように、文の前部に対する後部での内容の拡張を示す。

（4）の場合も、原文では“何況長者、自知財富無量、欲饒益諸子、等与大車（「何に況んや、長者自ら財富無量なりと知って、諸子を饒益せんと欲して等しく大車を与うるをや」）。”が続き、結果的に立派な車を与えたのだから“虚妄”には当たらないと主張されている。冒頭に見られる“何況”とは、連詞“況”に疑問代詞“何”が前置された表現であり、例えば『淮南子』「原道訓」“欲害之心亡於中、則飢虎可尾、何況狗馬之類乎（「害せんと欲するの心、中に亡ければ、則ち飢虎も尾す可し、何ぞ況んや狗馬の類をや」）。”の“飢虎”と“狗馬”に見られるように、やはり内容の拡張を示している。

1. 3. 比況表現による〈声聞乗〉〈縁覚乗〉〈菩薩乗〉の説明

世尊は、まるで燃え上がる家屋のような“三界”から人々を脱出させようと試み、3種類の乗り物を人々に与えると告げる。その乗り物が〈声聞〉〈縁覚〉〈菩薩〉である。

〈声聞乗〉〈縁覚乗〉〈菩薩乗〉の説明に使用された表現を次に挙げる。

(5) T09-0013B

如彼諸子、為求羊車、出於火宅。

彼の諸子の羊車を求むるを為て火宅を出ずるが如し。

(6) T09-0013C

譬如長者、有一大宅。

譬えは長者、一の大宅あらん。

(5) は〈声聞乗〉の説明部分に当たる。この後、更に〈緣覺乗〉について“如彼諸子、為求鹿車、出於火宅（「彼の諸子の鹿車を求むるを為て火宅を出ずるが如し」）、〈菩薩乗〉について“如彼諸子、為求牛車、出於火宅（「彼の諸子の牛車を求むるを為て火宅を出ずるが如し」）”と記されている。各文では、〈声聞乗〉〈緣覺乗〉〈菩薩乗〉それぞれの内容について説明するため、類似した行為の内容が揭示され、文頭には比況を示す助動詞“如”が置かれている。

“如”の字義については、『説文解字』に“從隨也（「從ひ隨ふなり」）。”とある。白川1996:780は「巫によって示される神意に従うことをいう」と解釈し、従順の意となって「如くす」の意となると述べている。

このような“如”の前置による比況表現は、例えば『孫子』「軍争篇」“故其疾如風、其徐如林（「故に其の疾きこと風の如く、其の徐かなること林の如く」）”にも見られる。そこでは“疾”“徐”の様子を表現するために、類似の現象を発生する事物として“風”“林”が挙げられている。

世尊は、“大乘”を与えても嘘には当たらないと主張して“方便力故、於一仏乗、分別説三（「方便力の故に、一仏乗に於て、分別して三と説きたもう」）。”を知るべきと舍利弗に告げ、“三乗”を説いて人々を導く。その理論については、詩頌の形式で説明された部分があり、そこで揭示された譬喩の内容が（6）から始まっている。

（6）では、（1）と同様、仮設された状況について説明され、譬喩の内容で描かれる人物“長者”の特徴について“有一大宅”と明らかにされている。但

『妙法蓮華經』の譬喩表現に関する一考察（椿）

し、(1)とは異なり、(6)では冒頭に“譬如”が置かれている。

“譬如”とは動詞“譬”に“如”を後続させた比況の表現である。ある理論について説明するために類似の状況の仮設が必要となった場合、“譬如”は仮設させた状況を描写した部分の前に置かれる。例えば『論語』「為政」“為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之（「政を為すに徳を以てするは、譬えば北辰の其の所に居て、衆星の之に共するが如し」）。”では、“為政以德”が理論に当たり、“譬如”以後の部分で状況が仮設されている。

2. 〈窮子喩〉（「信解品」）

2. 1. “譬若”の前置による仮設の表現

世尊から教えを聞いた須菩提、摩訶迦旃延、摩訶迦葉、摩訶目犍連は、舍利弗も成仏できることを知って驚き、“我等今者、樂説譬喩、以明斯義（「我等今者楽わくは譬喩を説いて、以て斯の義を明さん」）。”と告げる。そこで自分達の解釈した理論を立証するために揭示した譬喩が〈窮子喩〉である。

〈窮子喩〉では、ある男（窮子）と父親（長者）との関係について描かれている。男は父親の下を離れて何十年も他国に滞在し、やがて裕福となった父親の屋敷に辿り着く。ところが、男はそれが父親とは気付かず、屋敷の立派さに驚いて脱出を図る。父親は安心させるために男に汲み取り等をやらせる。父親は自分の死期が近づいていることを悟り、男とは親子の関係にあることを告げ、遂には財産を譲る。

〈火宅喩〉と同様、〈窮子喩〉の場合も内容は状況の仮設から始まり、問題が提起された部分が仮定形式によって挿入されている。それに該当する部分を次に挙げる。

(7) T09-0016B

譬若有人、年既幼稚、捨父逃逝……

譬えは人あつて、年既に幼稚にして、父を捨てて逃逝し……

(8) T09-0016C

我若得子、委付財物、坦然快樂、無復憂慮。

我若し子を得て財物を委付せば、坦然快樂にして復憂慮なけん。

(7) では、まず“有人”によって人物の存在が示され、その経歴について以後の部分で記述されている。冒頭に置かれた“譬若”は、“譬”に“若”を後続させた表現であり、“譬如”と同様に状況の仮設を示す。例えば『史記』「魏公子列伝」“譬若以肉投餒虎（「譬えば肉を以て餒虎に投げるが若し）」。”では、“以肉投餒虎”が仮設された状況に当たる。

(8) は父親の気持ちを表した部分であり、“得子委付財物”に連詞“若”が前置されて仮定形式が構成されている。仮設された状況には、息子による財産の相続が含まれ、そこまでの部分が仮定を示す条件となる。結果については“坦然快樂無復憂慮”とあり、心配が不要な状況になる可能性について表されている。

2. 2. 詩頌の形式による表現

以上の理論については、更に摩訶迦葉が詩頌の形式で説いた部分が続いている。それに含まれる表現を次に挙げる。

(9) T09-0017C

譬如童子、幼稚無識、捨父逃逝、遠到他土。

譬えば童子、幼稚無識にして、父を捨てて逃逝して、遠く他土に到りぬ。

(10) T09-0018B

如彼窮子、得近其父、雖知諸物、心不恡取……

彼の窮子の其の父に近づくことを得て、我が為に諸物を知ると雖も心に恡取せざるが如く……

(9) では、(6) と同様に“譬如”が冒頭に置かれ、“童子”以下“他土”ま

『妙法蓮華經』の譬喩表現に関する一考察（椿）

での部分が仮設の内容に含まれる。主体の身分は“童子”と表現されているが、特徴についての説明に“幼稚無識”が補足されているので、表示される身分の程度は窮子と同等であると解釈される。

(10) では、“知諸物”と“心不憍取”に連詞“雖”が前置され、両者間に於ける転折関係の成立が表示されている。また、文頭に比況を示す“如”が置かれることから、(10) 全体は説明部分を後続させるための類似表現の揭示に当たると捉えられる。

更に、(10) の直後には、“我等雖説、仏法宝蔵、自無志願、亦復如是（「我等仏法の宝蔵を説くと雖も、自ら志願なきこと、亦復是の如し」）。”が続き、ここでも(10)と同様に“雖”の前置により転折関係の成立が表示されている。仮にこの表現を後部、(10)を前部と設定した場合、後部に含まれる指示代詞“是”の対象は前部(10)の“如”以下の部分に当たる。

3. 〈薬草喩〉（「薬草喩品」）

3. 1. 自然現象の描写による表現

世尊は、摩訶迦葉その他の弟子達に“汝等若於、無量億劫、説不能尽（「汝等若し無量億劫に於て説くとも尽くすこと能わじ」）。”と指摘し、自分は“示諸衆生、一切智慧（「諸の衆生に一切の智慧を示す」）。”と告げる。そこで揭示された譬喩が〈薬草喩〉である。〈薬草喩〉では、この世の植物は名称も性質も様々であるが、雨は同じ雲から平等に注がれると記され、このように如何なる者も平等に成仏できると説かれている。

自然現象の描写に当たる部分を次に挙げる。

(11) T09-0019A

譬如三千大千世界、山川谿谷土地、所生卉木叢林及諸薬草……

譬えは三千大千世界の山川・谿谷・土地に生いたる所の卉木・叢林及び諸の薬草……

(12) T09-0019C

出現於世、譬如大雲、善覆一切。

世に出現すること、譬えば大雲の普く一切に覆うが如し。

(11) では、仮設された状況が風景描写によって揭示され、冒頭には“譬如”が置かれている。原文では、更に“種類若干、名色各異、密雲弥布、遍覆三千大千世界、一時等澍（「種類若干にして名色各異り、密雲弥布して遍く三千大千世界に覆い、一時に等しく澍ぐ」）。”が続き、文末の部分までが仮設の内容に含まれる。

この後には、上記の理論について世尊が詩頌の形式で説いた部分が続き、仏の出現する様子は“仏亦如是（「仏も亦是の如し」）”と描写されている。(12) は、その現象について説明された部分に当たる。

(12) は、世尊が詩頌の形式で説いた部分に含まれる。そこでは、“大雲善覆一切”が仮設された状況に当たり、(11)と同様に冒頭には“譬如”が置かれている。この他、“出現於世、如大雲起（「世に出現すること、大雲の起るが如く」）。”では、仏の“出現於世”の形容に“大雲起”が適用されている。

3. 2. 降雨の描写による平等な成仏の形容

世尊は、詩頌の形式により説いた部分の中で“恒為一切、平等説法（「恒に一切の為に平等を説く」）。”と主張し、その方針についての説明を後に続けている。そこにも自然現象の描写が見られる。

それに該当する部分を次に挙げる。

(13) T09-0020A

去來坐立、終不疲厭、充足世間、如雨普潤。

去來・坐立終に疲厭せず、世間に充足すること、雨の普く潤すが如し。

(14) T09-0020B

『妙法蓮華經』の譬喩表現に関する一考察（椿）

譬如大雲、以一味雨、潤於人華、各得成実。

譬えば大雲の、一味の雨を以て、人華を潤して、各実成ることを得せしむるが如し。

(13) では、自然現象を描写した“雨普潤”に比況を示す“如”を前置させて類似の状況が示され、“去來坐立終不疲厭充足世間”の効果について説明されている。但し、“仏平等説、如一味雨（「仏の平等の説は、一味の雨の如し」）。”と表されてはいるが、“隨衆生性、所受不同、如彼草木、所稟各異（「衆生の性に随って、受くる所不同なること、彼の草木の稟くる所各異るが如し」）。”という条件が加わることも補足されている。

(14) では、以上の内容が全て包括され、“仏所説法（「仏の所説の法」）”を説明するために掲示された部分となる。冒頭には“譬如”が置かれ、“大雲以一味雨”により得られる効果について表現されている。

(14) 以後の部分では、世尊は摩訶迦葉等に“以諸因縁、種種譬喩、開示仏道（「諸の因縁、種種の譬喩を以て仏道を開示す」）。”と告げ、“是我方便、諸仏亦然（「是れ我が方便なり、諸仏も亦然り」）。”と補足している。この部分では、世尊が“開示仏道”のために自分が応用した手法の正当性が強調されたと解釈される。

4. 〈化城喩〉（「化城喩品」）

4. 1. 宝所を目指す悪路の描写

〈化城喩〉では、多くの人々が宝所を目指して歩く様子が描かれている。人々は、悪路を進んだために疲労が生じ、歩き続けることを拒否し始める。その時、ある導師が神通力で都城を造り上げ、人々の疲れも消えていく。

譬喩の冒頭に位置する部分と内容の主題に当たる部分を次に挙げる。

(15) T09-0025C

譬如五百由旬、險難惡道、曠絶無人、怖畏之處。

譬えば五百由旬の險難惡道の曠かに絶えて人なき怖畏の處あらん。

(16) T09-0026A

若入是城、快得安穩。

若し是の城に入りなば、快く安穩なることを得ん。

(15) では、人々が“怖畏之處”に到着した様子が描写され、“怖畏”の感情を抱かせた状況として“險難惡道曠絶無人”が揭示されている。ここでは、仮設を示す表現として冒頭に“譬如”が置かれている。

疲労と不安に襲われて引き返そうとする人々に対し、導師は“汝等勿怖、莫得退還（「汝等怖ることなかれ、退き還ること得ることなかれ」）。”と告げて阻止し、都城の存在を伝える。(16) は、その時に発した内容に当たる。

(16) では、連詞“若”の前置によって仮定形式が構成されている。ここでは、“入是城”が条件の部分、“快得安穩”が結果の部分に当たり、もし都城に入れば休息が可能になることが表現されている。

また、(16) の直後には“若能前至宝所、亦可得去（「若し能く前んで宝所に至らば、亦去ることを得べし」）。”とあり、ここでも連詞“若”の前置による仮定形式が構成されている。但し、後部で強制を示す助動詞“可”が使用されていることから、全体的には宝所に向かって相手に出発するよう強く促すことを表現すると解釈され、(16) はそれを導くために設置された部分と捉えられる。

4. 2. 神通力を発揮する効果の表示

世尊は、弟子達に“所得涅槃、非真實也（「所得の涅槃は眞實に非ず」）。”と告げ、“於一仏乘、分別説三（「一仏乘に於て分別して三と説く」）。”の“方便之力（「方便の力」）”によるものと説明し、導師の行為や発言も同様のものと訴えている。更に、弟子達に“今説法華經、令汝入仏道（「今法華經を説いて、汝をして仏道に入らしむ」）。”と告げ、その直後に譬喩の内容が揭示されている。

譬喩の冒頭に位置する部分と内容の主題に当たる部分を次に挙げる。

(17) T09-0026C

譬如陰惡道、迴絶多毒獸、又復無水草、人所怖畏處。

譬えば陰惡道の迴かに絶えて毒獸多く、又復水草なく、人の怖畏する所の處あらん。

(18) T09-0027A

我亦復如是、為一切導師。

我も亦復是の如し、これ一切の導師なり。

(17) では、“人所怖畏處”の様子について描写されている。そこでは、冒頭に“譬如”が置かれ、それ以後の部分が仮設された状況に当たることが分かる。

導師は、神通力によって都城を造り上げ、そこで人々が休息し終わると“汝今勤精進、当共至宝所（「汝今勤め精進して、当に共に宝所に至るべし」）。”と告げた。そこで〈化城喩〉は終わり、その直後に掲示された部分が（18）である。

（18）は世尊の発言内容に当たり、人称代詞“我”と指示代詞“為”は、何れも世尊自身を指す。ここでは、世尊が自分の存在価値が導師と類似することを主張している。文中には更に比況を示す表現“如是”が含まれ、この指示代詞“是”も導師が実行した行為の内容を対象としている。

5. 〈衣珠喩〉（「五百弟子受記品」）

5. 1. 宝珠の売却を勧める意思の表示

「五百弟子受記品」では、世尊が五百人の弟子達に将来的に成仏できると告げる様子が描かれている。弟子達は、愚かにも自分達が“得究竟滅度（「究竟の滅度を得たり」）。”と思っていたと反省し、その要因について“我等応得、如来智慧、而便自以、小智為足（「我等如来の智慧を得べかりき、而るを便ち自ら小智を以て足りぬと為しき」）。”と述べている。そこで掲示された譬喩が〈衣珠喩〉である。

『妙法蓮華經』の譬喩表現に関する一考察（椿）

譬喩の冒頭に位置する部分と内容に含まれる部分を次に挙げる。

(19) T09-0029A

譬如有人、至親友家、醉酒而臥。

譬えば人あり、親友の家に至って酒に酔うて臥せり。

(20) T09-0029A

常可如意、無所乏短、仏亦如是。

常に意の如く乏短なる所なかるべしといわんが如く、仏も亦是の如⁴⁾し。

(19) では、まず話題の中心となる人物の存在が“有人”によって示され、その行為の内容が以後の部分で描写されている。冒頭には“譬若”が置かれ、文全体が仮設された状況であることが分かる。

ある者が友人宅で酒に酔い、友人はその者の衣服の端に“無価宝珠（「無価の宝珠」）を縫い込む。その後、その者は他国で働くが苦勞し、友人は“無価宝珠”を売るべきだったと告げる。(20) は、その際の友人の発言内容から始まり、それに対して弟子達が下した結論までの部分に当たる。

(20) の直前には、“汝今可以此宝、貿易所須（「汝今此の宝を以て所須に貿易すべし」）。”とあり、これを(20)と連結すれば、宝珠を売却して好きなことを全て実行するよう促す表現となる。弟子達による“仏亦如是”の指示代詞“是”は、友人が宝珠の売却と収益の使用を促す様子が対象に当たる。

5. 2. 弟子達による自論の表明

世尊の言葉に歎喜した阿若橋陳如等は、自分達が“得少涅槃分（「少しき涅槃の分を得」）”の状態で満足していたことを告げ、それは過失であったと認めた。そこで、譬喩を利用して自分達の反省すべき点を示した。

譬喩の冒頭に位置する部分と内容に含まれる部分を次に挙げる。

(21) T09-0029B

譬如貧窮人、往至親友家。

譬えは貧窮の人、親友の家に往き至りぬ。

(22) T09-0029B

富有諸財物、五欲而自恣、我等亦如是。

富んで諸の財物あって、五欲に而も自ら恣ならんが如く、我等も亦是の如し。

(21) では、まず人物の存在が表示され、行為の内容が以後の部分で描写されている。(19)と同様、冒頭には“譬若”が置かれ、文全体が仮設された状況であることが分かる。

その者は、衣服の端に“無価宝珠”を縫い込まれ、他国で働き苦勞するが、それでも“無価宝珠”の存在は忘れてしまう。友人が“無価宝珠”を見せると、その者は大いに歓喜し、(22)はその時の気持ちを表現した部分に当たる。

(22) では、“富有諸財物五欲而自恣”で状況が仮設され、その部分は文末の“如是”に含まれる指示代詞“是”の対象に当たる。“我等”は発話者の自称詞として使用され、文全体は歓喜の程度を表現するために譬喩の内容を利用して構成されたと捉えられる。

6. 〈譬子喩〉（「安樂行品」）

6. 1. 明珠の重要性の表示

「安樂行品」では、世尊が文殊師利から“於後惡世、云何能說是經（「後の惡世に於て、云何してか能く是の經を説かん」）。”と問われ、“當安住四法（「當に四法に安住すべし」）。”と答えて説明を始める。その説明部分で掲示された譬喩が〈譬子喩〉である。

譬喩の冒頭に位置する部分と内容に含まれる部分を次に挙げる。

(23) T09-0038C

譬如強力、轉輪聖王、欲以威勢、降伏諸国、而諸小王、不順其命。

『妙法蓮華經』の譬喩表現に関する一考察（椿）

譬えは強力の轉輪聖王の、威勢を以て諸国を降伏せんと欲せんに、
而も諸の小王其の命に順わざらん。

(24) T09-0038C

若以与之、王諸眷属、必大驚怪、文殊師利、如来亦復如是。

若し以て之を与えれば、王の諸の眷属必ず大いに驚き怪しまんが如
く、文殊師利、如来も亦復是の如し。

(23) では、冒頭に“譬如”が置かれて譬喩の内容の発端となる部分が揭示されている。そこでは、話題の中心となる轉輪聖王の置かれた状況が描写されている。

轉輪聖王は、戦いで功績のあった者に様々な恩賞を授けたが、譬の中にある明珠だけは与えなかった。その理由として“独王頂上、有此一珠（「独王の頂上に此の一つの珠あり」）。”が挙げられ、(24) はそれに関して更に詳しく説明された部分に当たる。

(24) では、まず冒頭に連詞“若”が置かれて仮定形式が構成され、“以与之”が条件、それ以後の部分が結論に当たる。更に文末は“如是”とあり、仮定の内容として揭示された部分が指示代詞“是”の対象ともなっている。

6. 2. “如”の前置による仮定形式の構成

世尊は、轉輪聖王が兵士達に譬の中の明珠を与えたように、法華經を最高の經説と認めて広めたことを告げた。その説明の中で〈髻子喩〉が利用されている。

譬喩の冒頭に位置する部分と内容に含まれる部分を次に挙げる。

(25) T09-0039B

如有勇健、能為難事、王解髻中、明珠賜之、如来亦爾。

如し勇健にして、能く難事を為すことあるには、王髻中の明珠を解いて之を賜わんが如く、如来も亦爾なり。

(26) T09-0039B

説是法華、如王解髻、明珠与之。

是の法華を説くこと、王髻の明珠を解いて之を与えんが如し。

(25) では、まず動詞“有”により人物の存在が示され、それに続く“勇健能為難事”では、人物の功績について表現されている。冒頭に仮定を示す連詞“如”が置かれることから、そこまでの部分は状況の仮設に当たり、“王解髻中明珠賜之”は結論に当たるので、全体としては仮定形式が構成されたと判断される。

“如”は、既に挙げた“若”とも使用条件は類似しており、白川1996:780は「字の用義は“若”と近く、形義に通ずるところがある」と認めている。両語彙は、共に中称の指示詞に当てられることもあり、藤堂1978:322は、仮定条件を指示する連詞“如”を「現場にないものをさす働きの一用法」としている。

(25) に見られるような仮定表現は、例えば『孟子』「告子章句」“如有能信之者、則不遠秦楚之路（「如し能く之を信ばす者有らば、則ち秦楚の路をも遠しとせず」）。”にも見られ、そこでは“有能信之者”が条件、“不遠秦楚之路”が結果に当たる。

文末の“如來亦爾”に含まれる“爾”は指示代詞であり、“如”から“之”までの仮定形式の部分が対象に当たる。世尊は“以大慈悲、如法化世（「大慈悲を以て、法の如く世を化す」）。”の達成に採用する方針について説明し、そのために(25)に構成された仮定形式の部分を類似の内容として挙げている。

(26) では、“説是法華”が実行される様子を説明するため、同程度の価値が含まれる行為として“王解髻明珠与之”が挙げられ、そこには“如”が前置されている。“明珠与之”に含まれる“之”は指示代詞であり、“髻明珠”が対象に当たる。

7. 〈医子喩〉（「如来寿量品」）

7. 1. 仮定形式による人物の存在感の表示

「如来寿量品」では、世尊が多くの菩薩や大衆に対して“汝等当信解、如来誠諦之語（「汝等当に如来の誠諦の語を信解すべし」）。”と告げ、如来の存在が得難いものであることを人々に教え込むべきと主張している。そこで掲示された譬喩が〈医子喩〉である。

譬喩の冒頭に位置する部分と内容に含まれる部分を次に挙げる。

(27) T09-0043A

譬如良医、智慧聡達、明練方薬、善治衆病。

譬えは良医の智慧聡達にして、明らかに方薬に練し、善く衆病を治す。

(28) T09-0043A

若父在者、慈愍我等、能見救護。

若し父在（いま）しなば、我等を慈愍して能く救護せられまし。

(27) では、まず話題の中心となる良医の置かれた状況が“譬如”の前置により仮設されている。“智慧聡達”以下の部分では、その性格について表現されている。

ある良医が他国に行った時、子供達が毒にあたって苦しむ。帰った良医は、子供達に薬を与えるが、精神が正常でなくなった子供達は飲もうとしない。そこで、医者¹は姿を消し、自分は死亡したことにした。(28) は、その時の子供の心理を描写した部分に当たる。

(28) では、冒頭に連詞“若”が置かれて仮定形式が構成され、“父在”が条件、“能見救護”が結果に当たる。“能見救護”に含まれる“能”は、可能を示す助動詞であり、“見救護”が内容に当たる。

“救護”の直前に置かれた“見”は、助詞として使用されたと捉えられ、その

表示機能には指示性が含まれている。ここでは、直後に掲示された行為“救護”が自分に対する（時には相手に対する）内容であることを示す語彙として使用されたと判断される⁵⁾。

7. 2. 良医の行為に対する評価

良医の尽力により、精神が正常でなかった子供達も正常に戻って薬を飲み、全員の命は救われた。その際に、良医が子供達を救うために自分が死亡したと思込ませたことに対する評価について、以後の部分で表示されている。

それに該当する部分を次に挙げる。

(29) T09-0043B

頗有人能、説此良医、虚妄罪不。

頗し人の能く此の良医の虚妄の罪を説くあらんや不（いな）や。

(30) T09-0043C

如医善方便、為治狂子故、实在而言死、无能説虚妄……

医の善き方便をもって狂子を治せんが為の故に、実には在れども而も死すというに、能く虚妄を説くものなきが如く……

(29) では、動詞句“有人”によって人物の存在が表現され、可能を示す助動詞“能”以下の部分で人物の能力が表現されている。能力の内容には動詞“説”と“此良医虚妄罪”が含まれ、“有”はそのような発言の可能な人物の存在を示す。しかも文末には否定副詞“不”があるので、全体的には反復疑問の形式が構成されている。

(30) では、“医善方便”“治狂子”に“故”が後置されて要因を示し、“实在而言死”が結果に当たるので、ここでは因果関係が成立している。そこまでを条件と解釈すれば、後続する“无能説虚妄”は結果に当たり、冒頭に比況を示す“如”が置かれることから、(30) 全体は直前までに記述された理論を説明するために〈医子喩〉の内容を利用して構成されたと判断される。

8. おわりに

『法華經』に見られる様々な譬喩表現は、文中で書き手が主張する内容を他者へ正確に伝えるための大切な要素であり、その価値については、文中に於いても主張されている。例えば「譬喩品」では、用例（6）以後の部分に掲示された譬喩の利用価値について、世尊が“我為衆生、以此譬喩、説一仏乗（「我衆生の為に、此の譬喩を以て、一仏乗を説く」）。”と評し、舎利弗に“汝等若能、信受是語、一切皆當、得成仏道（「汝等若し能く、是の語を信受せば、一切皆當に、仏道を成ずることを得べし」）。”と告げる様子が描かれ、“得成仏道”を促す素材としての譬喩の有用性について明らかにされている。

「法華七喩」に含まれる譬喩の内容は、何れも状況の仮設から始まり、本論での調査の結果、殆どの譬喩で“譬如”が冒頭に置かれていることが判明した。この表現は、文中に描かれた行為や現象について、類似する状況の提示により説明する場合にも応用され、「菓草喩品」の用例（12）（14）に効果が確認される。森繁1976:229は、比況を示す語彙の中で六朝訳經に使用されるものとして“如似”“像如”“譬如”“猶如”を挙げ、その中で“譬如”“猶如”は古小説にも使用されていると指摘し、これを根拠として、六朝訳經では口語から吸収された表現も文章語として使用されていた可能性を認めている。

また、“如”の部分には、既に述べられた内容を対象とする指示代詞“是”を後続させて“如是”も構成する。例えば、用例（20）“仏亦如是”（24）“如來亦復如是”では、“是”の指示対象に当たる内容の実施者に発話者も含まれることの表示に応用されている。

この他、譬喩の内容では、仮設された状況に於ける行為の実行や現象の発生を掲げるためには、それらを原因または条件に設定した仮定の表現も必要となる。「法華七喩」の場合、殆どの仮定表現で連詞“若”が使用されていることが判明した。

『妙法蓮華經』の譬喩表現に関する一考察（椿）

黎錦熙1992：218によれば、仮設を示す連詞の使用により表現される内容には、確定した因果の法則や仮想された条件と共に、推測された予言や浪漫的な想像も含まれている。この指摘からは、“若”の使用により構成された仮定形式は、読み手に対する指導を目的に著わされた經典の内容に於いては相応しい表現であると考えられる。

本論では、『法華經』文中の所謂「法華七喩」で使用される語彙の原義や機能についてまとめ、特に比況を示す連詞の使用効果について分析した。その結果、譬喩表現の中で状況が仮設される部分では、適切な機能をもった語彙が効果的に使用されていたことが確認された。

〈参考文献〉

- 王力1962. 『古代漢語（第二冊）』、中華書局。
太田辰夫1964. 『古典中国語文法』、汲古書院。
大平宏龍2011. 「法華七喩のあらまし」、『大法輪』 2月号：82-89頁。
白川静1996. 『字通』、平凡社。
藤堂明保1978. 『漢和大辞典』、学習研究社。
東元慶喜1968. 「仏典に見える譬喩の種類」、『印度学仏教学研究』 第33号：374-377頁。
望月一憲1966. 「法華經の譬喩について」、『印度学仏教学研究』 第29号：382-385頁。
森野繁夫1976. 「六朝訳經の語彙」、『広島大学文学部紀要』 第36巻：215-236頁
黎錦熙1992. 『新著国語文法』（漢語語法叢書）、商務印書館。

〈注記〉

- 1) 大平2011：82を参照。
- 2) 本論で引用された例文には『大正新脩大藏經』（全83巻、1925年7月発行、1988年2月普及版発行、大正新脩大藏經刊行会）文中での使用箇所を示す記号を付す。最初のTは「大正」、数字は巻数と頁数、最後のA～Cは段数を示す。
- 3) 各例文の直後には、参考のため『訓訳妙法蓮華經并開結』（井上四郎編輯、平楽寺書店、1957年1月発行）に書かれた書き下し文を付す。
- 4) 書き下し文「いわんが如く」に該当する部分は、原文には含まれていないが、原則通り『訓訳妙法蓮華經并開結』に使用された文をそのまま引用した。
- 5) 『実用文言詞典』（陳延嘉、左振坤、馬世一主編、天津人民出版社、1933年7月発

『妙法蓮華経』の譬喩表現に関する一考察（椿）

行）を参照。

〈キーワード〉

譬喩、仮設、比況、仮定、連詞